
新ロードオブザリング

ま～ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新ロードオブザリング

【Nコード】

N6998K

【作者名】

まーちゃん

【あらすじ】

本作の主人公？ である指輪の登場シーンです。

この後の物語の中心となる指輪がビルボからもたらされます。どのようにして彼は指輪を手に入れたのでしょうか。

闇の中の指輪（前書き）

映画ロードオブザリングを見た人の中にはいろいろと不満のある人もいる。主人公弱すぎ。魔法使いが魔法を使わない。話が長すぎ。女性キャラの活躍がいまいち。ラスボスもいまいち。ドラクエみたい。原作挫折した。などなど。

そこでこれらの不満点を解消すべく、新ロードオブザリングを始めました。

オリジナルとはかなり違うのでそこところは平にご了承くださいませ。

闇の中の指輪

0 . プロローグ

ビルボは息をひそめて立っていた。彼の前には奇妙な生き物がいる。ぬらりとした体。大きな頭。異様なまでに大きな目。黄色く光る目……。だがそいつにビルボは見えていない。ここが暗い洞窟だからではない。ビルボが指輪をはめているからだ。この奇妙な生き物から奪い取った指輪を。姿を消す指輪を。やつはビルボを探している。愛しい指輪を奪ったビルボを殺すために。指輪を取り戻すために。ビルボが近くにいることを感じながら。ビルボのおいをかぎ取りながら。

ビルボの手には一振りの剣が握られていた。エルフの短剣ステイイグが。ビルボは一気に踏み込んでこの奇怪な生き物を仕留められたかも知れない。だが仕留め損ねたら……。やつの大きな手がビルボの首を砕くだろう。それはやつも同じ事。やつは何かを感じていた。飛びかかる事の危険を。

おぞましい生き物が迫ってくる。もう目と鼻の先だ。ビルボは飛んだ。やつの背後の出口を目指して。やつの背中を超えて。手が伸びる！ つかまれた！ 足首だつ！ いや浅いつ！ やつの手がくるぶしを滑る。しりもちをつくビルボ。とっさに突き出す剣。当たった。やつの悲鳴。腕を押さえて転げ回っている。跳ね起きる。走り込む。やつの首に剣を押しあて。一気に力を……。やつの目を見た。怯えた目。哀れな目。だめだ出来ない。

「おねがいだ、だんなさま。その、ひどいやいばで、このゴラムをこれいじょう、きづつけないでくれよ」

やつは口をきいたのだった。

ビルボは用心深く指輪を抜き取った。あらわになつた剣を目の当たりにして頭を抱えて怯える生き物。ビルボは情けをかけたのだ。ゴラムと名乗るこの生き物に。ビルボはゴラムに誓いを立てさせた。危害を加えないという誓いを。

こうしてビルボはゴラムの洞窟から魔法の指輪を手に入れて冒険の旅から帰つたのだった。

待ちに待った誕生日 - 其の1

この日、ホビット庄に住む村人たちの話題はビルボ・バギンズの111歳の誕生日で持ちきりだった。

なにしろ、ホビット庄でビルボはいつも話題の中心だったのだ。なぜなら、彼ほどの名声と賞賛を勝ち得た者は誰もいなかったからだ。事実、ビルボは信じられないような数々の冒険を重ねホビット庄に莫大な財宝を持ち帰り、時には最強の悪竜スマウグもたった一人で打ち滅ぼすほどの偉業を成し遂げたのだった。

ビルボがこれほどの事をなしえたのはなぜか。それは、彼には卓越した才能がありしかも冒険の中で獲得していった強力な武器や魔法の品々の持ち主だったからだ。

ビルボがこれまでの冒険から持ち帰った宝物の数はすさまじく、ホビット庄の至る所にビルボの宝物庫が掘られ、金銀財宝や魔法の品々で埋め尽くされ、まさしくホビット庄全体がビルボの財宝の上に有ると言えた。

今やそれらの財宝の恩恵もホビット庄の住人たち全員の力の源となり、全ての村人がそんな恩恵をもたらしたビルボをあがめているのであった。

そして今宵、ビルボの誕生日が盛大に行われているのだった。

ホビット庄の真ん中には大きな広場があり、広場の中心には財宝の山が高く積み上げられ、大きなたき火の明かりで輝きながら夜空を背景にそびえていた。その山の頂上に向かって真っ赤な絨毯が敷かれていた。絨毯にはドワーフの名工が織り込んだ繊細な金系の装飾が施され、見る物の目を引きつけていた。そしてこの宝物の山の頂には太古の王がこの世にある全ての種類の宝石が埋め込ませて作らせたと言われている伝説の金の玉座が置かれていた。

ビルボは今や王族の衣装を身に纏い巨大な王冠をかぶって輝ける大杯を夜空に掲げていた。

「予は今宵111歳、全ての酒、全ての馳走、全ての享樂を与えよう。さあ、^{はらから}同胞ども、腹から声を出して予を称えるのだ。」

ビルボの高らかな言葉に誕生日の宴は益々盛り上がりを見せるのだった。

「なんかビルボって最低。何がはからよ」

ビルボのギャグのくだらなさには鼻白んで、そう言ったのはまだあどけなさの残る、ホビットの若い少女、ピピンだった。軽くウエーブのかかったつややかな金髪を肩に触れる程度に短く切った活発な少女で、丸みのある青い目はいつもいたずらそうに光っていた。

「ピピン、そんなこと言っちゃだめよ。みんなに聞かれちゃう」
周りに気を配りながらおどおどして言ったのはメリーだった。

メリーはホビットの中で百年に1人生まれると言われている猫の耳と尻尾を生やした少女で、すらりとした肢体に艶のある黒髪が腰まで流れ、アーモンド型の緑色の目の持ち主だった。

年齢はピピンより年上だが、ピピンと反対におとなしい性格だった。

そんなメリーとピピンはとても仲良しでいつも一緒に行動しては、はしやぎすぎるピピンをメリーがやんわりとだが注意してあげたり、メリーがピピンから勇気をもらったりしているのだった。

「この騒ぎじゃどんなに大声でビルボの事を言ったって聞こえないわよ」

ピピンがメリーの心配をよそにつまらなそうにつぶやいたとき突然空の上から暖かみのある老人の笑い声が響いてきた。すると魔法のかかった花火が次々と打ち上げられ、夜空を様々な色で自在に染め上げ、やがて夜空に神話で語られるような美しい宮殿の姿が光の線で描きあげられた。夜空に描かれた光の宮殿は立体的まるで空に別世界が現れたようだった。宮殿の庭には噴水があり噴き出す光の水は様々な色に変化しながら本当に動いているように見えた。そして、宮殿の大門がファンファーレと共に開くと、その中から虹色に輝く光の波ががあふれ出し、光の中から朗らかな笑い声と、明朗

と響く歌声と共に、空飛ぶ馬車を駆った人物がこちらに向かってやってくる。

「ガンダルフだわ」

ピピンの顔がパッと笑顔に輝いた。

ど派手な登場の仕方だが、ピピンはガンダルフと呼ばれているこの灰色の大魔法使いが大好きだったのだ。

待ちに待った誕生日・其の2（前書き）

ビルボの111歳の誕生日の夜、空からみんなの前にと派手な登場をしたのは大魔法使いのガンダルフだった。

待ちに待った誕生日 - 其の2

「フォッフォッフォッ」

と、馬車を駆って空から降りてきた人物こそ灰色の大魔法使いガンダルフだった。

地面に到着すると馬車からひらりと飛び降り両手を広げると彼の背後の夜空に更に花火が次々と打ち上がった。

「ガンダルフー」

「ガンダルフッ」

メリーの声と誰かもう一人若い青年の声が重なり、ガンダルフは左右両側の首に同時に誰かに抱きつかれサンドイッチになった。それでもががつちりと受け止めたのはさすがガンダルフだった。ガンダルフは見た目は老人で、長い灰色のあごひげを生やし頭には灰色の三角帽子をかぶり体には灰色のマントを身につけ手には灰色の木の枝で出来た杖を持ち、一見すると薄汚い感じがするが、その腰にはエルフの名剣グラムドリリングを携え、戦いとなれば魔法を使わずにオークの大群を絶滅させるほどの強さを誇っていた。

そんな彼の首に飛びついた一人はメリーだがもう一人はフロド・バギンズだった。

フロドはビルボの甥でビルボと大変仲が良く、子供のいないビルボの正式な跡取りだった。また、ビルボとガンダルフは旧知の仲なのでフロドもガンダルフとは旧知の仲で友人だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6998k/>

新ロードオブザリング

2010年10月30日19時40分発行